

25/07/15

<パスカル>を表象する、学の試み

野呂 康  
(岡山大学言語教育センター准教授)

本日は本研究会によろしくおいで下さいました。本日の司会を務めさせていただきます野呂と申します。当企画は大阪大学文学研究科と、「文芸事象の研究会」という、企画により構成員が変わる研究会による主催となりますが、後者を代表いたしまして、本日の開催趣旨についてご説明申し上げます。

本企画は「<表象>のパスカルーパスカル学への新たな寄与の試み」と題し、三回の公開研究会で構成されます。本日がその第1回にあたり、第2回は10月10日(土)に岡山、そして最終回である第3回は東京での開催を予定しております。

各回に共通しておりますのは、石川知広先生の御講演、続いて今回の主旨に同意していただいた17世紀フランス文学、哲学、歴史学の研究者による発表、そして全登壇者による対話、以上のような形式です。なぜこのような形式をとるに至ったかと申し上げますと、通常講演というものは、専門家が広く一般に知識を提供することを目的とします。石川先生は今年度をもって御奉職先である首都大学東京を退官されますから、先生の御警咳に接した者として、長年の研鑽の成果をより多くの人に直接披露していただきたいと考えたのは確かです。しかし、単なる講演であるなら、「学への新たな寄与」は生まれにくい。なぜなら、少なくとも専門家の間では或る程度の情報が共有されていますし、多くの場合、講演内容というものは既に活字化されているか、遅かれ早かれ活字化されるものだからです。このことは講演会の仕組みそのものと関係しています。既に人目を引いた業績をあげているからこそ、講演依頼がなされるわけで、講演では依頼内容に合わせて人目を引く(つまり既知の)話をせざるをえません。そのような仕組みの中で、知識は自ずから、講演者から聴衆に一方的に授けられるものと認識されるのです。

本企画では専門家の話に相槌を打つという、一方通行を避けたいと考えました。内容だけでなく方法論も含め、一つの学のあり様が提示され、それが聞き手に働きかけ、聞き手が揺さぶられれば、リアクションとして、誰も想像しなかった、いわば次が読めない対話が生じます。そこに「新しい学」の可能性を探りたいと考えました。受身で知識を授かるのではなく、講演者の知識、方法、問題関心などに触れた後進の研究者が、同意、違和感、疑問などを表明し問いただす。次にそれを聞く皆さんが疑問と違和感を感じられる。そのような仕組みを作る「試み」の場としたかったのです。

石川先生には、内容だけでなく方法論も含めた先生の学そのものを、いわばたたき台としてご提示いただき、それに対して登壇者には疑問や違和感をぶつけていただくよう御願ひしております。会場にいらした方も最後まで御聞きになれば、当然、三者の研究や方法の差異について、御気づきになる点があると思われまふ。時間の許す限り、対話に参加していただきたいと思ひます。

以上のような関心から、本企画では敢えて講演会ではなく、公開の、それも研究会という形式をとった次第です。

次に、「<表象>のパスカル」という奇妙な題名についてご説明申し上げます。当初、私が石川先生に提示した題名は独自の概念であることを示すカギカッコぬきの「表象のパスカル」で、さらにComment représenter l'auteur <Pascal>?というフランス語を付しておりました。これは、文体や思考のレベルで、機能的な統一性を持ったパスカルなる作家をどのように想い描くことができるのかという、フォーコーの発した「作家とは何か?」に由来する問題意識を反映したものでしたが、先生はむしろ「表象」の方に力点をおかれ、「パスカルを表象する」、われわれの行為そのものの意味を問う Représenter-Pascal という造語で返してこられました。「表象する」という動詞と作家「パ

「パスカル」の間に置かれたチレの意味、先生の表象されるパスカル像、そして他の作家ではなく他ならぬパスカルを表象する行為の意味については、三回の御講演の中で次第に明らかにしていただけるものと思いますので、ここでは、本日の議論の前提となる表象という語について、簡単に確認しておきたいと思います。

フランス語のreprésenterという語には「表現する、（演劇などを）上演する、～の代理をする、代表する」などの意味があります。十七世紀の辞書では、「或る対象の像あるいは肖像を描くこと」とか、「言葉や行為」あるいは「何らかの比喩、徴により」「事物を知らしめること」とも記されています。要するに表象とは「鏡」や絵画を用いて、対象を写し取ったり表現する行為であるといえます。ラテン語のrepraesentare、すなわち「出現させる、眼の前にしかと存在するようにする、言葉によって再現する」がその語源となります。つまり、目の前に実在する対象を、心の中で「再び」現前させ、さらにそれを言葉や絵画という手段で再現することを意味するのです。われわれが事物を認識するに際して、生のままの対象を把握することはできません。心の中で一度再現し、さらにその心の中の像を言葉や絵画を用いて、いわば再再現するのです。ここに解釈と表現の多様性の根源があるといえるでしょう。一方で、文学であれ美術であれ、作品によっては、見る人によって見解が異なり、解釈の混沌に行き着くことがあります。他方で、唯一の権威の発する、一義的な解釈というのもありえます。ところが、たとえ専門家が絶対の権威と知識を誇ろうとも、そうした見解でさえ、幾重もの再現の産物なのです。この不可避な認識のあり方をポジティブにとらえ直すなら、認識に自己を介すのですから、解釈の責任と説得力は表象する人物の行為と倫理観に多くを負うといえます。それならば、「パスカルを表象する行為」とは、パスカルを想い描く者の行為と責任を理解することになるでしょう。パスカルという「作家に会うことを期待していたのに、人を見いだす」というわけです。

さて、以上のような表象という語の含意を踏まえるなら、全3回に渡る本企画で登壇する6人の研究者がどのようなパスカル像、17世紀像を示して下さるか、そして本企画に参加して下さる皆さんにどのような像を想い描いていただけるか、非常に楽しみです。

長くなりました。それでは、石川知広先生に御登壇願います。

石川先生は現在、首都大学東京人文科学研究科に御勤めで、御専門は17世紀フランス思想・文学、主として、パスカルを始めとするポール＝ロワイヤル・グループとその現代的意義についての研究をされております。本日のお話は、1662年に初版が刊行され、1683年に最終増補がなされた、アントワヌ・アルノーとピエール・ニコルの共著である、通称『ポール・ロワイヤルの論理学』に関するお話です。この書には既に日本語訳がありますが、18世紀に刊行された『アルノー全集』を底本としており、非売品として、現在では入手困難な状態です。

この書の増補部分の基底には、論理学の解説を逸脱した、カトリックとプロテスタントによる熾烈な神学論争が横たわっています。ミシェル・フーコー、ジャック・デリダ、ルイ・マランといった二十世紀後半に活躍した思想家たちは、まさにこの増補部分をめぐり論争を展開しました。本日のお話は、それに関するものと御伺いしております。それでは石川先生、よろしく御願います。

\*\*\*\*\*

石川先生、有り難うございました。

それでは10分程度、質疑応答の時間を設けたいと思います。どうぞ、肩書きなどに関係なく、御自由に、想い浮かんだ御質問をなさってください。

\*\*\*\*\*

それでは、ここで10分程度の休憩を入れまして、15時20分から再開いたします。

\*\*\*\*\*

それでは再開いたします。続きまして、大阪大学文学研究科の山上先生に御登壇願います。山上先生は近世フランス文学と思想をの御専門とされ、エティエンヌ・ド・ラ・ボエシの『自発的隷従論』の素晴らしい翻訳と解説をちくま学術文庫から出されたのは記憶に新しいところです。その他近著としては、19

世紀の画家であるオディロン・ルドンの興味深いパスカル像を表紙とされた『パスカルと身体の生』を上梓されています。本日の発表題名は「パスカルと動物の魂」です。よろしく御願います。

\*\*\*\*\*

山上先生、有り難うございました。続きまして、追手門学院大学の武田先生に御願います。武田先生は主に17世紀の哲学と科学史の領域で多くの業績をあげられています。近年ではデカルト書簡集の翻訳や、『デカルトの運動論 数学・自然学・形而上学』という優れた著作を上梓されております。武田先生には「『ポール・ロワイヤルの論理学』とデカルト」についてお話しいただきます。

\*\*\*\*\*

武田先生、有り難うございました。それでは10分間の休憩をいれたいと思います。再開後は、本日お話しいただきました三人の先生方に御登壇願ひ、鼎談の形で議論を深めていただきたいと思います。存じます。

\*\*\*\*\*

それでは鼎談に入りたいと思います。鼎談の題名は「フーコーと17世紀のエピステーメー」となります。よろしく御願います。

(会場からの質問も受け付ける)

\*\*\*\*\*

それではそろそろ本日の会を終わりたいと存じます。

本日を締めくくりにあたり、次回の予告をさせていただきます。次回は「パスカル：思考と実在の形而上学」と題しまして、岡山大学にて、石川先生と永瀬春男先生に御登壇いただきます。石川先生は「パスカルとユダヤ人」という題名で、パスカルのユダヤ人表象についてお話していただきます。17世紀、パスカルの生きたパリに、ユダヤ人はいなかったといわれています。それなのにパスカルは、『パンセ』の中で、キリスト教徒と対比しつつ幾度となくユダヤ人に言及し、自身の世界表象に不可欠の要素として組み込みます。なぜパスカルは、存在しないはずのユダヤ人にかくもこだわったのでしょうか。従来の研究ではほとんど顧みられなかった、パスカルにおけるユダヤ人の形象について、議論を展開していただきます。

またもう一人、パスカルの発明に帰する計算機研究の第一人者であられる永瀬春男先生にもお話しいただきます。永瀬先生には「パスカルにおける科学、論争、レトリック—計算機体験を中心に」という題名で、計算機の発明をめぐるパスカルの戦略、そしてその思考とテキストから透けて見える現実についてお話しただけのことと思います。

パスカルが現実ユダヤ人に逢うことがあったとすれば、それは父親の仕事の都合で赴いたルアンでのことに他なりません。そしてまさしくこのルアン時代が、計算機の着想から製作に至る時期に該当するのです。石川先生、永瀬先生にはお話ししていただいた後に、やはり対談を御願ひしておりますので、ユダヤ問題と計算機がどのような観点から同一の土俵に上がるのか、今から楽しみにしております。

さて、最後となりますが、御登壇くださりました先生方、本企画のためにわざわざ足を運んでくださりました会場の方々に御礼申し上げます。それでは本公開研究会を終わりにしたいと存じます。有り難うございました。